

わが愛する土佐くろしお鉄道

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	土佐の人々	7
第二章	持ち時間	40
第三章	北のルート	64
第四章	報告書	89
第五章	八月の三日間	117
第六章	郷土史	143
第七章	歴史に挑む	171

わが愛する土佐くろしお鉄道

第一章 土佐の人々

1

原田一郎は、去年、国家公務員試験の成績が良かったので、財務省に入る事になった。財務省と言っても、国税局の方である。

一年後の今日、原田は初めて有給休暇を使つて、郷里の四国に帰ることにした。

原田の故郷は、高知県の安芸市^{あき}である。四国を走る私鉄は、琴電が有名だが、高知県を走る『土佐くろしお鉄道』も、自分の故郷の安芸市

を通るので、原田の自慢の一つだった。ただ、「安芸です」

というと、安芸の宮島と間違えられてしまうので、

「土佐くろしお鉄道の安芸です」

と言うと、今度は、高知から四万十川^{しまんと}の方面に走る『中村線』ですか？ 中村線にそんな駅がありましたか？ と言われてしまう。

土佐くろしお鉄道は、三つの路線があつて、有名なのは高知県西南部の窪川―中村間を走る『中村線』と、中村―宿毛^{すくも}間を走る『宿毛線』である。何と言つても最近では、土佐藩の坂本龍馬が有名で、その為に高知・中村・宿毛、それに四万十川が有名になってしまい、土佐くろしお鉄道というと、そちらの方、と誰もが考えてしまうのである。

高知県の東部を走る『ごめん・なはり線』の事を頭に描いてくれる人は少ないので、

「私の郷里の安芸市の近くには、市営の球場があるんですよ。そこは、『球場前』という名前の駅があつて、阪神タイガースが、キャンプをするので有名になっています。そのため、安芸の人たちも阪神タイガースが好きで、黄色と黒の縞模様のタイガース列車というのが走っています。もう一つの自慢は、『ごめん・なはり線』の終点は『奈半利駅』で、そこから五十キロ先には、有名な室戸岬があります」

と、説明する事にしていた。

原田が好きなのは、海の青と山の緑に恵まれている。残念なのは、誰もが、

「四国は、鉄道には恵まれていませんね」

と、話すことだった。確かに、四国全体をぐ

ると回る路線は無いし、電化されている区間は限られていて、その他は全て非電化・単線区間である。特急も、ディーゼルが多い。それに、「私が生まれた安芸市に行くには、土讃線の特急に乗ると『後免』の次は『高知』で、その後免から土佐くろしお鉄道の『ごめん・なはり線』は出ていて、『安芸駅』はその『ごめん・なはり線』の中心の駅です。他の駅は無人駅が多いのに、この安芸駅では駅員が常駐します。

もう一つ、安芸市は三菱財閥で有名な岩崎弥太郎の生家があり、『叱られて』とか『春よ来い』という童謡で有名な弘田龍太郎が生まれた町でもあり、安芸の町の中には彼の作曲を記録する碑がいくつも建っています」

と、いっても、四国に詳しくない相手だと、「ごめんなんて珍しい名前ですね。けど、地方

にはよくある名前じゃありませんか」

と、笑うのである。原田の生まれ育った安芸市は、岩崎弥太郎や阪神タイガースがキャンプする市営球場などで何とか分かってくれるのだが、安芸から先の駅についてはほとんどの人が、知らないのである。

室戸岬を知っている人は多いが『ごめん・なはり線』の終点、奈半利について知っている人はまず居ない。第一、どういう字を書くのかも説明しないと分かってくれないのである。原田は郷里に帰るたびに、その風土の美しさ、海の青さ、山の緑を改めて好きになるのだが、鉄道マニアでもある原田にとって悔しいのは、やはり四国の鉄道である。

新幹線が北海道の新函館まで延びた時、ある新聞が「これで日本全土を新幹線が走る事にな

りました」と書いてあるのを見て腹が立ち、四国を忘れているじゃないかと、抗議の手紙を書いて出した事があった。

原田は別に、四国にまで新幹線が来なくてもいいと思っている。ただもう少し、鉄道の路線が増えて欲しい。特に室戸岬まで行くには、鉄道がそこまで延びていないので、室戸岬を回って、鉄道で四国を一周、という訳にはいかないのである。原田に言わせれば、その隙間を埋めようとして作られたのが、土佐くろしお鉄道である。

土佐くろしお鉄道は昭和六十三年、JRの中心線を引き継いで生まれた、第三セクターである。土佐くろしお鉄道の路線は、それぞれ途中で止まってしまっているが、発足当時は、その先まで延びて、四国一周の悲願を達成しようと

いう意気込みがあった。

例えば、『ごめん・なはり線』の終点・奈半利駅は、地方にある小さな駅ではない。三階建ての大きな駅である。明らかにその先まで路線を延ばし、室戸岬を回って徳島県の阿佐海岸鉄道の『甲浦駅』と接続すれば、東部の方は、完全に四国を一周出来る循環線が完成する。宿毛線もその先を『宇和島』まで延ばせば、四国の西部にも循環線が生まれるのである。

三つの土佐くろしお鉄道の路線は、明らかに、四国を一周する鉄道網を、完成する為に生まれた第三セクターなのである。それが国の鉄道計画で、予算が付かなくなった為に、中途半端な路線に終わってしまった。

原田は郷里の安芸に、帰るたびに、四国には新幹線は要らないから、何とかして四国を一周

する循環線を完成させて欲しい。そして、出来ればもう少し電化区間を延ばして欲しいと思うのだ。

原田にとって今回は、一年振りに帰る郷里の安芸だが、両親と妹に会える楽しみその他にも一つ楽しみがあった。それは、二年前から付き合っている早川ゆきと、一緒に安芸へ行くことであった。

早川ゆきは、原田のS大の後輩で、この春からS大の四年生になった。たまたま文化祭で知り合って、同じ四国の出身で、彼女は高知市の生まれで、鉄道にも興味があつて、その事から親しくなっていた。

昨年 of 正月に、二人は実家を行き来して、お互いの両親と会ったのだが、今回、自分は社会人となり、東京から二人で、高知に帰るのだ。

原田はゆきに対して、責任感のようなものを感じていた。

原田は初めて、新幹線の岡山までのグリーン券を買い、岡山から高知までの特急『南風』の切符を添えて、彼女に渡してあった。

四国に着いての一日目は、彼女の高知市内の家を訪ね、二日目に土佐くろしお鉄道に乗って、安芸まで行き、原田の実家に立ち寄る、というスケジュールを作っていた。

2

その日、四月十日。いつもより早く起きてシャワーを浴び、背広に着替えて芦花公園のマンションを出ると、代々木八幡の彼女のマンションに迎えに行った。原田が今住んでいるのは1

Kの小さなマンションだが、彼女の住んでいるのは代々木八幡の真新しいマンションで、2LDKの広さがあった。それはそのまま、彼女の郷里、高知市内に住む両親が、資産家であることを示していた。

彼女のマンションに着き、五階に上がろうとしてエレベーターを待っていると、突然背後から屈強な男二人に両腕を、掴まれてしまった。

「原田一郎だね？」

と、いきなり男の一人が、きく。

「そうですか、一体なんですか」

「これから503号室の、早川ゆきの部屋に行くんじゃないのかね」

「そうですが、これは一体何なんですか？」
と、きいた。

「まあ、とにかく五階に上がろう」

もう一人の男が言い、両腕を掴まれたままエレベーターに、乗せられた。

五階でエレベーターを降りる。相変わらず両腕を、男二人に、掴まれたままである。五階の廊下には、朝早いのに、住人たち何人かが出てきて、503号室の方を覗いている。

「君の名前と写真が、部屋のパソコンに入っていたよ。とにかく部屋に入って」

男の一人に、押し込まれる恰好で、503号室に入っていた。

「早川くん」

と、呼びながら、ベランダに近い六畳の部屋に入った時、絨毯じゅうたんの上にパジャマ姿の早川ゆきが、うつ伏せに倒れているのを、見る事になった。

部屋には男女が数人いて、女性と男性のコン

ビがゆっくりと、うつ伏せに倒れている早川ゆきの体を仰向けにした。原田は反射的に、後ずさりした。白茶けた顔、その口からは、血が流れ出していて、かっと見開いた目は何かを、睨にらんでいる様に見えた。

「君の知っている早川ゆきだね？」

男の一人が、きく。

「そうですが、これは、一体何なんですか？」

「彼女は今から数時間前に、殺されたんだ。今日の午前〇時から、三時位の間にだ」

「どうして、殺されたんですか？」

「それを知りたいのは、こっちだよ。どうしてこの時間に、このマンションを、訪ねて来たのかね？」

原田は、そこにいる数名の男と女が、私服の刑事に違いないと思った。

「今日、二人で四国へ行く事になっていたんですよ。だから迎えに来たんです。東京発9時30分の新幹線で岡山まで行き、岡山から郷里の高知へ行くんです」

「嘘じゃないだろうね？」

「嘘なんか、ついていませんよ」

原田は、小刻みに震える手で背広の内ポケットから、切符を取り出して、相手に見せた。

「確かに今日の切符だが、彼女の切符はどうしたんだ？」

「僕が買って渡してあります。同じグリーン車の切符ですよ。社会人になって、初めて一緒に郷里へ帰るので、奮発したんです」

と、原田がいう。

「おかしいな」

刑事の一人が、いう。

「この部屋を、全部調べたが、こんな切符は、見つからなかったぞ。彼女が旅行を断ったので、カッとしてこのマンションへ押しかけて来た。

そして喧嘩になって、彼女を殺した。自分が疑われると思って、わざとこの時間にもう一度訪ねて来て、一緒に高知へ行く筈だとアリバイを作ろうとしているんじゃないのか？」

刑事が、意地悪くいう。

「僕はそんな事しませんよ。喧嘩もしていないんですから」

「今日の午前〇時から午前三時までどこに居たんだ？」

刑事の一人が、同じことをきく。

「自分のマンションで寝てましたよ。それから朝五時過ぎに、起きて、顔を洗って、こうして彼女を迎えに来たんですよ」

「それを証明出来るのか？」

「出来ませんよ。一人でマンション暮らしです。

僕は、二十四歳独身です。そんなの誰だって、寝てる時の証明なんか出来ないでしょう」

どうしても反抗的になる。それがまた、部屋にいた刑事たちの反感を、買ったらしい。

「とにかく、君の指紋を採らせてもらう」

「鑑識」と書かれた腕章を巻いた男が二人来て、彼の手を押さえて指紋を採り始めた。強い力なので、抵抗は無駄だと、すぐに分かった。

「どうして、彼女は殺されたんですか？」

と、きいてみた。

「そんな事は我々よりも、君の方が詳しいだろう。とにかく、彼女はキッチンにあった包丁で、背後から刺されて殺されたんだ。その包丁の柄に、君の指紋が付いているんじゃないのか？」

観念するんだな」

「それは違いますよ！」

「違うって、何が違うんだ？」

「僕は時々このマンションに遊びに来て、料理を作った事が、あるんです。だからキッチンの包丁の柄に、僕の指紋が付いていたって、おかしくはないんですよ。そんな事で、いちいち犯人にされちゃかなわない」

「なかなか、言うじゃないか」

刑事の一人が、皮肉を込めて笑った。

早川ゆきの死体は、司法解剖の為に運び出され、原田は渋谷警察署に連行された。手錠こそはめられなかったが、力ずくで連行する様な、荒っぽい扱いだった。逃げたらまずいとでもいうのか、腕を掴まれ、そのままエレベーターを降り、パトカーに乗せられた。

渋谷警察署に着くと、取調室に入れられ、十津川という警部と、亀井という刑事が、尋問にあたった。

「まず、君の身分証明書を見せて貰おうか」

原田は財務省国税局の身分証明書を見せた。

名刺も、それに添えて渡すと、

「驚いたね。君は国家公務員か」

亀井刑事が、いう。

「去年の四月に、財務省国税局の職員になったばかりですよ。それでも公務員です」

「困ったもんだ。国家公務員が殺人容疑者とはね」

「僕は彼女を殺してなんかいませんよ。何回言えば、分かるんですか！」

と思わず原田は、二人の刑事を睨んだ。十津川警部の方が、

「これから、こちらの質問に、正直に答えてくれればいい。まず、聞きたいのは、殺された早川ゆきと、どうして知り合ったのかだ」

「彼女は大学の後輩なんです。S大の文化祭があつて、その時に、彼女と知り合ったんです。郷里が同じ高知だし、彼女も鉄道が好きだったので気が合つて、親しくなりました」

「それからの付き合いかね」

「そうです」

「今日一緒に、高知に行くと言っていたな」
「そうですよ。彼女は高知市の生まれで、僕は同じ高知県の安芸市の生まれです。だから、二泊三日で、まず彼女の実家に行き、翌日は僕の家案内するつもりなんです。去年から公務員になりましたからね。僕の方で、高知までの切符を買って、渡しておいたんです」

「しかし、彼女の部屋にはいくら探しても、君と同じ新幹線と岡山からの特急の、高知行きの切符は、見当たらなかった。君が渡したのに、どうして見つからなかったのかね？」

「そんな事、分かりません。彼女を殺した犯人が、持ち去ったんじゃないませんか？」

「それはおかしいんじゃないのかね」

と、亀井刑事が、いった。

「どこが、おかしいんですか？」

「新幹線と岡山からの特急を使って、高知まで行くというが、まだゴールデンウィークになってないんだから、切符は自由に入るだろう。たかが数万円の切符の為に、犯人は早川ゆきを殺したとでもいうのかね？」

「僕には分かりません」

「そんな犯人は、まず考えられない。それより

も、君は、彼女を連れて高知へ行こうとしていた。切符まで買って渡した。ところが喧嘩になり彼女が高知行きを拒否して、君から貰った切符を、破いてしまった。その事にカッとして君は、彼女を殺した。しかし、それでは自分が疑われると思い、一旦、自宅に帰ってから、朝になつてもう一度、このマンションを、訪ねて高知行きを誘っていた様な態度を、取ったんだ」

「違いますよ。僕はそんな事はしません」

「彼女と一回も、喧嘩をしなかった、とでも言うのかね」

「喧嘩は何回か、しましたよ。その位、当たり前でしょ。喧嘩をした事が無い方がおかしいんだ」

「切符を渡したのはいつなんだ？」

十津川が、きく。

「J Rの切符は一ヶ月前から売り出されているんです。確か、三月十五日に東京駅で買って、翌日の十六日に彼女に渡しました。彼女喜んで、失くさない様にすると言っていたんです」

「君は独身で、マンション住まいだと言っているが、どこに住んでいるんだ？」

「京王線の芦花公園のマンションですよ」

「どんなマンションかね？」

「どうしてそんな事を、聞くんですか？」

「一応、君の事を、知りたいからだ。部屋は広いのかね？」

「僕はまだ、公務員になったばかりですから、

1 Kの小さな部屋ですよ」

「なるほどね。君が1 Kの小さなマンションで、殺された彼女は、学生なのに新築で2 LDKだ。どうしてそんなに差があるんだ？」

「それは、彼女の高知の家が資産家だからでしょう。僕の両親は同じ高知の安芸市で、小さな雑貨店をやっているだけですから」

「それで、君たちの交際に、彼女の家が、反対していたんじゃないのか？ よくあるケースだ。それに彼女はまだ、S大の学生なんだろう？ まだ学生で、そのうえ実家の大きさが違う。それで彼女の両親が、君たちの交際に反対だった。それで君は、カッとなった。彼女は親の言う事を聞いて、君と付き合うのをやめようとした。だから、今日からの高知行きも断った。そうなんじゃないのかね？」

「そうなら今日、彼女を誘うなんてしませんよ。確かに、彼女の家の方が豊かですが、喜んで僕と彼女との交際を、認めてくれていたんですよ。だから二人で、高知に行く事にしたんです」

「それでは、君の両親が、反対だったのか？」

「どうして、僕の両親が、反対するんですか？」

「君は一年前に、国家公務員試験に合格した。

しかも財務省だ。将来は高級官僚だろう。君のご両親は、君の事が自慢だった。そんな自慢の息子が、まだ大学生の、彼女と付き合う事には反対だったんじゃないのかね。それで、彼女が怒り、その怒った彼女に、君が腹を立て、喧嘩になって殺してしまった。そういう事も、考えられるんじゃないかね？」

「違いますよ。どうして僕と彼女が喧嘩をしたとか、仲違なかつたいしたとか、勝手に想像するんですか。確かに時々喧嘩はしましたが、今日は一緒に、高知へ行く事になっていたんですよ。そんな彼女を、僕が殺す筈ないじゃありませんか」「それでは、君が、犯人ではないとしてだが、

彼女を殺した犯人に、心当たりはあるのか？」

十津川が、きいた。

「心当たりはありません」

「しかし彼女の家は資産家だし、そのうえ彼女、なかなかの美人じゃないか。三年生の時に、ミスキャンパスに、選ばれた事もあると聞いたよ。そんな彼女が、君だけと付き合っていたとでも、言うのかね。君の他に、付き合っていた男が居ても、不思議じゃない。その事に君か、他の男が、焼きもちを、焼いて、彼女を殺した。そういう事だって考えられるだろう。君は一度も焼きもちを、焼いた事は無かったのかね？」

「そんなことは無かったとは言いませんよ。しかし僕たちは、上手くいってたんですよ。確かに彼女は美人で、学生の中に、彼女と付き合いたがっている者も居た様ですが、最近では、僕

だけの彼女になってくれていたんです」

「それが、証明出来るのかね？」

「分かりません」

「どうして？」

「彼女は学生で、僕は公務員ですからね。生活の場が違います。彼女は、大学だし、僕の方は役所ですから。彼女のことを完全に、何もかも、知っているとは言えません。でも彼女の気持ちはこちらに向いていてくれる、そういう安心感が、あったんです。だから尚更、こんな事に、なってしまった事に驚いているんです。訳が分からなくて。一体、何があったのか」

尋問が終わったが、原田は渋谷署に留置される事になった。

3

十津川たちは午後から、代々木八幡の早川ゆきのマンションを調べる事にした。

調べるにつれて、原田一郎の不利になるような物が、見つかったいった。

第一は、凶器の包丁である。その柄には、ハッキリと原田の指紋が付いていた。

第二は、管理人と、同じ五階にいる住人たちの証言だった。管理人は、朝から夕方五時までの管理人派遣会社の勤務時間の間に、早川ゆきの部屋を訪ねて来たのは、この数日間、原田一郎だけだったと証言した。五階の住人たちも、不審な人物は見たことがないと証言した。

第三は、東京から岡山までの新幹線と、岡山

から高知までの特急『南風』のグリーン車の切符が、見つからなかったことである。

そこで警察は、原田一郎の周辺の聞き込みを強化した。彼の友人、知人からの聞き込みを行う事に決め、十津川と亀井は、新幹線で岡山を経由して、高知まで行く事に決めた。

しかし、早川ゆきの両親が、現在、飛行機で東京に向かっているというので、まず両親から話を、聞いてから四国に行くことに変更した。

早川ゆきの父親・秀典は、高知市の市議会議長や団体役員、母親の秋子は高知婦人会の幹部をやっているし、そのうえ早川家というのは、高知市では旧家なのだという。資産家の上に、権力者でもある父親は、娘の遺体を見て、激しい口調で、

「一体、誰が娘のゆきを殺したんですか！」

と、叫んだ。

「まだ、捜査が、始まったばかりですから分かりません。これから捜査を進めていけば、容疑者が浮かんできると思いますが。ご両親には、おつらいと思いますが、警察に協力して頂きたいと思います」

と、十津川が、いった。

「勿論、協力させて頂きます」

秋子が、いった。

「娘さんは、東京の大学に、行っていた訳ですが、時々、高知の実家に、帰っていたんですか？」

「正月と夏休みには必ず帰っていました」

秋子が、いう。

「付き合っている男性については、ご存じでしたか？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。